

春燈

10

月刊

OCTOBER 2007



成瀬櫻桃子の句

寒牡丹非運の皇子が雪降らす

俳句とエッセイ「石光寺」昭和五十二年作

奈良県当麻染井の石光寺にての、寒牡丹観賞句。当麻寺と等しく、中将姫ゆかりの寺で、寒牡丹は気韻があつて特に美事。藁傘を深々と被った牡丹は、後ろから見ると仏様でも祀られているかと思う様。折しも二上山から、
大津皇子の非運の雪が霏

末吉治子

安住 敦の句

亡き母の容チにかがみ草むしる

私家版「成瀬櫻桃子の世界」平成六年

掲句はお母様の一周忌のころに詠まれている。櫻桃子先生はお母様の魂に添いたくなり、生前お母様がご自身の心に向き合っておられたであろうその場所に跼んで草掻りをされる。そうしていると俯く影や仕種までがお母様に同化した。「容チ」に想いが込められている。幼い頃から以心伝心で寄り添って来られた母子の絆の温もりが感じられ、几帳面で誠実なお姿が偲ばれる一句である。

池園 二二三江

西ヶ原日記

(35)

鈴木榮子

シャワー浴ぶ一日が終る沁々と
ハバロフスク小唄八月深夜便
帆立ソテー店主一人に客一人
暑き夜に熱き茶を喫む二杯喫む
帰省地も山荘もなし東京好き

氷室守氷挟みて自在にす
山の手線高架の低き夜の秋
削り氷の氷の繊維剥くやうに
無量寺の子供相撲も地藏盆
街騒に遠くゐてこの夏も老ゆ
下駄履いてみねばと世に言ふ跣足かな
待つて待つて決まる玉稿秋澄めり

下
総
秋
色

櫻
井
白
扇

立秋や夕日のあそぶ頼政祀
将門の塚を真近に大根蒔く
秋出水一茶杖曳く泪塚
古利根の波のつぶやく厄日かな
小鳥来る公民館に素十句碑
街道のつなぐ村々菊日和
穂薄のぽつかり空いて河童沼
筑波嶺を据ゑて稲刈はじめけり
頬白や妻立ち止る子飼川
木守柿鬼の作左の檀那寺

熊野古道

野崎昭子

春の灯に閉ぢては開く古道地図
往生を希ふ難路や杉の花
神将の視野をのがれし蜥蜴かな
清姫の吐息に舞へり竹落葉
盆怒仏の相ゆるませる夏の蝶
牛馬童子を驚かしたる夕立かな
声明をききつつ伸ぶる今年竹
辻仏のねむたき顔や芹の花
生涯を五常にそむき合歡の花
佇めり夏霧の奥見据ゑむと

当 月 集

鈴木 榮子選



○ 佐々木 新

遠年忌祖父が揮毫の古扇

崖下はけしたの新茶は甘し祖母の里

鷺草の風なき風を撫みけり

子の性は遺伝ゲンデン子が定むねぢればな

海老蔵のルイ・ジューベ似の巴里祭

○ 君塚 敦二

敦忌や父といふもの並べて孤独

梅雨の灯のともりて白し敦の忌

敦忌の頑固風鈴触れて鳴らす

神輿追ふ底抜屋台に耶舟ぬす

梅干と熱き番茶で暑に抗す

○ 禅山 志堂

禅林の僻邪の錆夏大獅子吼

夏蝶も一差舞へりをどり塚

尊徳廟薪負ふ像の眉涼し

梅雨曇る墓石寄場や俱会一処

螢火の一条胸に入りにつけり

○ 山川 好美

四万六千日信者幾重に大香炉

鬼灯市老舗雷粒粉買ふ

傘雨句碑駒形どぜう鱒鍋

追加にも中居すばやき鱒鍋

鱒鍋浅き鉄鍋菜味盛る

○ 布村 松景

胎内の斯くの如しと昼寝覚め

母の忌の近づく合歡の花咲けり

三伏や硯の岡のはや乾き

蔵町や一瞬よぎる夏燕

盆踊り一拍遅れ手をかざす

春燈の句

鈴木 榮子選

バンドネオン蛇腹くねらす大暑かな

神奈川 河本由紀子

「二二の三！」蚊帳をくぐりし兄妹

父の忌の記憶の暑さもどりけり
紅蜀葵こころの花と仰ぎけり

白日傘とちて隣へ遠会釈

向日葵の虜となりて館出づる(中川一政美術師) 愛知 植竹 惇江

麻暖簾わけて清方美人かな

青山椒蒸し上ぐ今年の安堵かな

七月や機械の喋るオダイジニ

千葉 西岡 啓子

敦忌の沙羅の落花をてのひらに

空蟬の何を怵ふる葉末かな

泳ぐ子の母ある浜を遠く見て

露草にこぼるる露や父の文
みどりごの命かぐはし真桑瓜
神奈川 金子 輝

叱られて炎昼の街歩きしこと

父の背の広し四万六千日灯す

はたた神魔の一瞬を現じけり

かたかたと定齋屋去りぬ夢の中

西瓜切る一家団欒遠のけり

白地着て母娘の店の灯しけり

汗しとど湿疹の身のかゆし痒し

寝たきりの友よ見給へ遠花火
東京 河合しよう

汗の大口胸にクルスのペンダント

七夕や泣いて笑つてすねて見せ

空蟬に恋の桎梏なかりけり

東京 入澤 正

禅林寺墓参日没までと記さる

このわたにうるかに雲丹に冷酒かな
夏風邪やモーツアルトも小煩く



余言

鈴木 榮子

富士塚は江戸の富士なり詣でけり

久本久美子

この富士塚は駒込の通称「お富士さん」富士神社でしよ
う。昔は一生のうち一度、富士詣をしたいという願望があ
ったのです。駒込の富士神社の社殿に昇る階段は片側一人
しか通れない急な階段で、真中の上り下りを分ける鉄の手
すりに添って上り下りをするようになる。昔の方の信仰心
の考え方がよく分かるのである。

甚平やなけなしの才ひけらかし

本田 保

作者も十代から俳句を始めたのではなからうか。東京會
館が三神社長の時代からの方である。

句意は別として、本田さんもやがて定年を迎えその後の

再就職もあつたと思う。中七下五の自嘲も別にそうではな
いけどー身に付いた俳句と共にこれからもやってゆこうと
いう気持だといっている。

をさなざや蠅螂の子のひとり旅

長谷川邦子

かまきりは鎌切、蠅螂、蠅螂、とカマキリ目昆虫の総称。
獐猛なことに他の虫を捕えて食べる。まことに生存競争
の世界は厳しいことである。そのかまきりも子孫を繁栄さ
せなければならぬ。蠅螂の子はどこへひとり旅をするの
であろうか。おさないものは神のお恵みにより愛くるしい
のである。卵からかえった小さな小さな蠅螂の子は、風に
乗ってそれぞれ飛び立ってゆく。風まかせである。それを
作者は「ひとり旅」ともの哀れに言い止めたのである。

買ふことに引き返しけり夏帽子

寺尾エツ子

この暑さ。帽子は家にあるが忘れてきたのか、計らずも
常々欲しいと思つていた形の帽子がウインドーにちらつと
見えた。いったん通り過ぎたものの、やっぱり欲しい。
欲しいものは買うとしよう。そうきめて引返しもう一度被

略) ってみた。好ましく思ったものは不思議と似合った。(以下